

## 特別展のお知らせ

## 特別企画「作庭家・庭園史家 重森三玲展」4月1日(水)～5月31日(日)

開館時間／9時～17時(4月24日[金]・5月22日[金]は19時まで開館)

※入館は閉館30分前まで

休館日／4月6日、13日、20日、27日、5月18日、25日

観覧料／一般300円、高大生200円、65歳以上・小中生無料

(団体20名以上は当日券の2割引)

「追悼 片岡球子展」(4月29日～5月17日)のチケットでも観覧可能



〈石組之圖〉  
本館蔵

このたび、岡山県立美術館では、昭和を代表する作庭家・庭園史家である重森三玲の展覧会を開催いたします。

重森三玲(1896-1975)は、岡山県上房郡賀陽町吉川(現・加賀郡吉備中央町吉川)に生まれ、日本美術学校で日本画を、同校卒業後には東洋大学文学部に学びました。その頃から、いけばな、茶道、建築などとともに、独学で庭園についても研究しています。三玲作庭の庭は、モダンな意匠の構成と力強い石組で知られる枯山水庭園が特徴で、京都の東福寺方丈庭園、松尾大社庭園などが知られています。

作庭のみならず、昭和14年(1939年)には、『日本庭園史図鑑』を上梓して庭園史研究の基礎を築き、昭和51年(1976年)には息子の完途(かんと)と共に『日本庭園史大系』全33巻(別巻2巻)を完成させるなど、庭園史研究者としても多大な功績を残しました。三玲は前衛いけばな運動の理論的指導者としても活躍します。勅使河原蒼風らといけばな界の革新を唱え、昭和24年には雑誌『いけばな藝術』を創刊。同時に流派を超えた研究会『白東社』を結成し、中川幸夫ら若きアーティストたちと交流を深めました。

今回の展覧会では三玲が調査した古庭園の実測図や、自身が作庭した庭園の設計図面(原因)をはじめ、当時の様子を撮影したガラス乾板の現像写真や、スケッチなどにより三玲の作庭家・庭園史家としての業績に焦点を絞り紹介するものです。あわせて彼の手になる書画や茶碗、遺愛の品なども公開します。

また、このたびの展覧会を契機として、三玲が吉備中央町在住の実妹のために設計し、自らデザインした書院の一部を、当館2階展示室に移築・再現します。

【学芸員 齋藤武郎】

## 平成21年度展覧会スケジュール(4月～8月)

4月1日(水)～5月31日(金)

会場:2F展示室

岡山の美術展「明治から戦前までの油彩画」

岡山の美術展「国吉康雄 ベストセレクション」

岡山の美術展「緑川洋一の写真《おちよ舟の女たち》」

特別企画「作庭家・庭園史家 重森三玲展」

6月5日(金)～8月23日(日)

会場:地下1F展示室

特別企画「郭沫若展」

7月17日(金)～8月23日(日)

会場:2F展示室および地下1F展示室の一部

特別展「建仁寺

—高台寺・圓徳院・備中足守藩主木下家の名宝とともに—

4月29日(水)～5月17日(日)

会場:地下1F展示室

特別展「追悼 片岡球子展」

6月5日(金)～7月12日(日)

会場:2F展示室および地下1F展示室の一部

特別展「朝鮮王朝の絵画と日本

宗達、大雅、若冲も学んだ隣国の美」

## 編集後記

美術館ニュース84号をお届けします。2月13日には中国地方で「春一番」が吹いたと発表されました。昨年、中国地方に春一番はなく、2007年に比べて1日早いとのこと。今号では、当館で「春一番」に開催する特別展・特別企画・岡山の美術展についてご紹介しました。昨年12月から始まった当館のリニューアル工事も大詰めに入り、春からお客様をお迎える準備が着々と進んでいます。 [S.T.]

## 特別展の紹介 追悼 片岡球子展 4月29日(水・祝)～5月17日(日)

2008年1月に103歳で亡くなった日本画家片岡球子は、鮮やかな色彩と力強く独創的な作風で知られ、院展の重鎮として活躍、現代日本画壇に大きな足跡を残しました。球子自身は札幌市生まれですが、父は総社市、母は里庄町の出身で、ともに岡山県人です。

本展は、球子の画業の全容を紹介する没後初の大規模な追悼展となります。展覧会の構成とおもな内容について以下に紹介します。

## 第1章：初期作品から転換期まで

札幌高等女学校の卒業を控えた片岡球子が画家の道を志したのは、「あなたは絵描きになるほうがずっと意義がある」という親友の一言がきっかけでした。女子美術専門学校で日本画科へ進学し、学外で帝展の画家吉村忠夫に師事します。卒業後は、横浜市大岡小学校に教師として勤めながら制作活動にも励みました。教鞭をとるかたわらの創作活動には、強い意志がもたらされましたが、球子の制作にかける情熱は揺らぐところがありませんでした。

はじめ帝展を目指しましたがかなわず、中島清之のすすめで院展に出品、25歳の時《枇杷》で初入選を果たしました。その後落選続きの時代を耐えて、34歳で《緑陰》が入選、院友となります。戦前は教え子などをモデルに風俗画風に描きましたが、戦後は歌舞伎や舞臺などの舞臺を好んで題材とするようになります。そして47歳の時、第37回院展出品作《美術部にて》で日本美術院賞・大観賞を受賞し、同人に推挙されます。

## 第2章：風景―富士と山々

球子は、昭和30年代中頃から人物画の背景として描いてきた風景を、独立した主題とするようになります。

いくつかの火山に取り組んだのちついに富士山へ行



〈枇杷〉  
昭和5年



〈山(富士山)〉  
昭和42年



〈面構 葛飾北斎〉  
昭和46年 神奈川県立近代美術館

会場／岡山県立美術館 地下1階展示室

開館時間／9:00～17:00(入館は16:30まで)※休館日なし

観覧料／前売800円(一般のみ)

一般1000円、高大生・65歳以上500円、小中生300円(団体20名以上は当日券の2割引)

## ■会期中のイベント

・ゲストによるギャラリートーク 講師:角島直樹氏(愛知県立芸術大学教授 院展特待) 4月29日(水・祝)10:00～

・記念講演会 講師:山梨俊夫氏(神奈川県立近代美術館館長)

開催日時／5月4日(月・祝)14:00～15:30 当館ホールにて開催(先着210名、聴講無料)

・学芸員によるギャラリートーク 開催日時／5月3日(日・祝)・5月10日(日)各14:00～ ※ギャラリートークに参加するには、観覧券が必要です

き着いた球子は、その魅力に圧倒され、季節や時間、位置などによって変化するこの山の多面的な表情を追求していきます。「雄大無比で厳しくしかも美しい。まったく大変な魅力です。」と語る球子は、毎年正月には富士山を拝みに出かけ、「富士に献花」をはじめ様々な富士の姿を描いています。

## 第3章：人物―「面構」と「裸婦」

風俗画の人物画、歌舞伎役者や舞臺の舞人など、球子にとって常に人物は主たるテーマでした。またモデルの衣装にこだわり、装飾性を強調しました。

61歳の時、女子美術大学から愛知県立芸術大学へと教える場を移しますが、それからのライフワークとして歴史上の人物を描く「面構」シリーズに着手します。足利尊氏や徳川家康ら武将、日蓮や白隠ら僧侶、戯作者、狂言師、現代の研究者ら多様な人物をテーマにしましたが、最も多く取りあげたのは浮世絵師です。それは球子にとって彼らが、「神のような存在」であったからです。この〈面構シリーズ〉を通じて、球子の画風は飛躍的な展開を見せ、独自の作風が一層際立ち、画壇に確固たる地位を築いていきます。

一方、喜寿を迎え、また日本芸術院会員に選ばれたのを機に、新たに〈裸婦シリーズ〉に挑み始め、毎年春の院展に出品します。球子の創作へのモチベーションは決して尽きることなく、生命を閉じるまで逞しい創造エネルギーを燃やし続けていたことが、この2つのシリーズによって証明されています。

本展では、60数点の本画を中心に、初公開となる「おおくにぬしのぼうけん」絵本原画やスケッチブックなども展示。横3メートルを超える大画面から、作家の息づかいが伝わるスケッチなど、球子の画業を幅広く紹介し、その魅力に迫ります。 【主任学芸員 中村麻里子】

